



在ケニア日本国大使館広報文化センター
合同企画
日本学術振興会ナイロビ研究連絡センター



ケニアで農業を考える 講演会



とき : 平成22年12月11日(土) 午後3時より
ところ : 日本国大使館広報文化センター多目的ホール
対象 : 日本語を理解できる一般の方



講師



浅井英利氏 (名古屋大学農学国際協力教育研究センター研究員)
「地球温暖化の作物学」

森元泰行氏 (バイオバーシティ・インターナショナル研究員)
「ケニアの伝統野菜の復活と栄養改善の事例」



講師略歴



浅井英利 (あさいひでとし)

1980年、滋賀県余呉町生まれ。京都大学大学院農学研究科修了、農学博士。専門は農業生態学、作物学。現在、ケニア西部において「不良環境での高収量稲生産システムの開発」に関する研究に従事している。

森元泰行 (もりもとやすゆき)

1967年、東京都生まれ。東京農業大学大学院農学研究科修了、農学博士。専門は農学、生物多様性研究。ケニアにある同研究所のサハラ以南アフリカ支所を拠点に、アフリカの多様な在来作物品種の遺伝資源利用・管理にかかわる農民の知恵や社会的メカニズムの潜在的な可能性を明らかにする研究を行っている。主な著作には

『How farmers in Kitui use wild and agricultural ecosystems to meet their nutritional needs (Kenya)』(CBD Technical Series No 52、共著)、
『Biodiversity of African vegetables, Chapter 2』(African Indigenous Vegetables in Urban Agriculture、共著)、
ヒョウタン在来品種の多様性とその維持にかかわる文化的要因、生物の科学 遺伝2004年9月号(58巻5号)、
人とヒョウタンのかわりあい。農林業協力専門家通信 Vol.24, No.6 (国際農林業協力・交流協会) など。

浅井英利氏 『地球温暖化の作物学』

私が所属していた作物学研究室のメインテーマは「地球温暖化と農業」でした。

「実家の魚屋を継ぐ」という幼いころの夢をあきらめたきっかけは、10歳の時に見たNHKの科学番組です。番組内での「地球温暖化により、2020年には本州近海では熱帯魚、北海道ではイワシしかとれなくなる」とのコメントは衝撃的で、魚屋では食っていけへんと思うとともに、地球温暖化という不思議な現象に興味を持ち始めたことを今でもよく覚えています。

学部時代は、地球温暖化の世界で稲の収量がどのように変化するかを予測するために、高CO₂・高気温の環境変化が稲の生育にどのような影響を与えるかについて研究を行っていました。大学院では、東南アジアで今でも幅広く行われている焼畑農業の炭素動態のメカニズムに関する研究を行ってきました。社会的・経済的な状況とともに焼畑農業の在り方が変化するにつれて、焼畑生態系からの二酸化炭素の放出量が急増するとともに、それが陸稲生産量の低下にもつながっていることが明らかになってきました。

これらの研究での経験を踏まえて、今回は、地球温暖化現象やその研究の現状と限界、また地球温暖化での農業についてお話をさせていただければとおもいます。

森元泰行氏 『ケニアの伝統野菜の復活と栄養改善の事例』

アフリカには実に多様な作物資源があります。またアフリカの人びとの自然に対する知識の豊かさによいいつも驚かされます。しかし、急速な近代化・西欧化の中で伝統作物の多様性が失われています。

このような背景の中で、バイオバーシティ・インターナショナルが中心になって、地域の多様な関係者を巻き込んだ在来遺伝資源利用のプロジェクトが実施されました。ケニアでは、外来の野菜を食べることが「現代的」で、地域原産野菜の消費は「後進」または「貧困」であるという考え方が存在し、採取する野生植物を含めて地域の植物資源の利用が急速に減少していました。作物学者と栄養学者が連携し、地域原産野菜が実は栄養価が高く、また栽培にも適していることを検証し、その結果をテレビやポスターを通じて周知しました。

その結果、ナイロビの大手スーパーマーケット等で地域の野菜が売られるようになり、伝統野菜の栽培が増大しています。流通やマスコミ関係者までが関わることによって、作物の多様性という文化的遺産、伝統的ルーツの再確認が行われ、野菜地方品種の消費が拡大した事例を紹介します。

